



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 『純粹理性批判』への数字の導入：判断形成における量のカテゴリーの位置付け  |
| Author(s)    | 中村, 修一  |
| Citation     | メタフュシカ. 2002, 33, p. 97-107   |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/66665">https://doi.org/10.18910/66665</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『純粹理性批判』への数学の導入

——判断形成における量のカテゴリーの位置付け——

中村修一

はじめに

カントは前批判期から一貫して、数学を確実な学の典型とみていた。そして数学に、確実性を主張できない臆見として哲学を対置する。両者は全く性質の異なる学とされる。この違いをカントは、数学と哲学の方法論の違いによるものとして特徴付ける。簡単にいえば、数学は総合的方法、哲学は分析的方法をこととする、というように。こうした数学と哲学の違いについての見解は、『純粹理性批判』（以下、『批判』と記す）超越論的方法論においても明確に述べられている。方法論によって数学と哲学を分け、同時にこの両者の混合を禁ずるという見解の背景には、確実な学である数学の方法を、やみくもに哲学に応用することに対する強い批判がある。

カントは、哲学に数学の方法を導入したところで、これまで何の成果も上がったためではない、と考える（*V. L. II 167*）。ともあれカントは、方法論の違いに基づいて、数学と哲学を相互に独立な学として捉える。

しかし他方でカントは、数学的概念を哲学に応用しようとする。それは『負量概念を哲学に導入する試み』（以下、『負量概念』と記す）にみられる。『負量概念』の意図は、「数学ではよく知られているが、哲学ではまったくなじみがない概念（負量概念）を、その哲学に関係させながら考察する」（*II 166*）と述べられる。そしてカントはこうした試みを、「新しい展望」(*Bid*)につながるものであり、哲学の「改善の道」（*II 186*）であるとする。事実『負量概念』の試みによって、詳細には立ち入らないが、「論理的対立」に還元されえない「実在的対立」の意義が確立されるとともに、批判哲学につながる

る生産的な視点が獲得されることになる。哲学の進展に寄与するものとして、確実な学である数学的概念を取り入れていく。

数学の特徴は、「数学の対象を構成するものは量である」(II 282)という言葉に端的に示される。数学的概念は量的把握が可能な対象にのみ適用することができる、ということである。『負量概念』では、負量の概念の説明に際して、力学、心理学、倫理学、物理学における、負量概念の使用の実例が示される。諸学問の差異にもかかわらず、これら諸学問すべてが量的なものとして扱われる。これは逆にいえば、諸学問を量の体系に還元して扱うことが、負量のような数学的概念の諸学問への導入を可能にしている、ということになる。したがって、確実な学である数学的概念を応用し、哲学の改善に進むためには、哲学を量の体系として捉えることが不可欠なのである。

『負量概念』では、負量という重要ではあるが一つの特殊な概念をもとに、哲学への数学の導入が考察された。では、カントにとって哲学の改善された形そのものである超越論哲学たる『批判』では、数学はどのように取り入れられているのだろうか。『批判』は人間の認識を可能にしている認識の仕方自体を問う。したがって、『批判』における数学の導入は、なんらかの数学的概念の導入につぎるものではあるまい。そ

うした導入を可能にしている基盤にかかわるものになろう。つまり、対象を量として捉えるという数学を可能にしている基盤を、哲学の基盤としてすえる点にあると考えられる。本論の課題は、こうした観点のもと、哲学の改善の手段とされる数学の哲学への導入を、哲学の改善のものである『批判』において確認することである。

カントは量、質、関係、様相の各カテゴリーそれぞれに独自の意味を付与し、そしてそれらのカテゴリーを軸に認識の仕方の批判を展開する。そこで、カテゴリー、ならびにカテゴリーから導かれる図式、純粹悟性の原則それぞれに与えられた意味の比較、検討を通して、認識の仕方の中に数学がいかに導入されているかを追跡しつつ、考察を進めていくことにする。量のカテゴリーは、現象の形式である外延量の産出にかかわる。これは、現象の形式に関して、数学の基礎付けを意味する。こうした機能を担う量のカテゴリーの、判断形成における優位性を明らかにすることで課題の解決としたい。本論では、もっぱらカテゴリーに従った判断形成の作用である悟性のはたらきのみ着目する。判断は常になんらかの文脈のもとでくだされるものである以上、判断形成と理性の統制的使用とは不可分な関係にあると思われるが、こうした関係については顧慮しない。

## 一 数学的カテゴリーは力学的カテゴリーに対して優位を持つ

純粹悟性の原則は数学的原則と力学的原則とにまず大別され、それぞれ構成的原則、統制的原則といわれる。「数学的カテゴリー」とされる量と質から導かれる原則が前者、「力学的カテゴリー」(B110)とされる関係と様相から導かれる原則が後者である。数学的カテゴリーによる数学的原則は、「直観(純粹直観ならびに經驗的直観)の諸対象に向けられる」(ibid.)。そうした数学的原則によって直観の諸対象、すなわち「現象」が「産出」されるという意味で、それら原則は「構成的」といわれる(A178f-B221)。一方、力学的カテゴリーによる力学的原則は、「これら〔直観〕の対象(対象相互の関係か、さもなければ悟性との関係における)の存在在(Existenz)に向けられる」(B110)。力学的原則によつては、現象を構成することはできない。その役割は数学的原則によつて構成された「直観の対象」たる現象についての関係を規定することにある。ゆえに力学的原則は、構成的ではなく、「統制的」(A179=B222)といわれる。付言しておけば、関係、様相カテゴリーの特性からいって、関係カテゴリーによる原則が「対象相互の関係」、様相カテゴリーによる原則

が「対象と」悟性との関係」に対応すると考えられる。ともあれこうした事態から導かれることは、力学的原則は数学的原則によつて産出される現象がなければ作用しようがない。数学的原則があつてはじめて意味を持つことができる原則である、ということである。原則の適用には二つの段階があるといえる。この点について、さらに検討しよう。

現象が産出されるだけでは、それは単なる知覚にとどまることになり、客観性を持つことにはならない。それは夢であるかもしれないからである。数学的原則だけでは現象としての対象が産出されるが、それが果たして客観的妥当性を持つか否かは決定されえない。さらに因果法則をはじめとする力学的原則のはたらきが加わらなければ、対象の客観性を主張することはできない。因果法則に即した記述であるが、次の引用がこうした数学的原則と力学的原則の関係を如実にあらわしている。

もしわたしが先行の現象を設定し、出来事がこれに必然的に継起しないとすれば、わたしはこの出来事をわたしの想像の主観的戯れと見なさざるを得ないだろう。そしてかかる主観的戯れの下に客観的な何かを思い見るとしても、それを単なる夢と名づけざるを得ないだろう (A201f=B247)。

この箇所は、現象が主観的戯れではなく、客観性をもつ出来事として認識されるための条件として、「時間継起の原則」

(B232)である因果法則の必要性を説いている。ここから次の二点が確認される。因果法則が適用される段階で、すでに現象が成立していることが前提されていること、さらに因果法則によって、そうした与えられている現象に客観性が付与されること、この二点である。先にみたように、因果法則に代表される力学的原則は、数学的原則によって産出される現象の関係を統制する。「たしかに夢の場合、量や質はもつが、諸対象の間に因果性のないことが多い。このようなことからしてカントは、因果性等の力学的範疇の適用によって、その知覚が夢と区別され、対象が実存在・客観的現実として確立されると見た」のである。

数学的原則は力学的原則なしにも作用することは可能である。力学的原則は数学的原則なしには意味を失う。数学的原則は力学的原則に先立つ、力学的原則に対する優位を持つ、ということができよう。これはそれぞれの原則の根底にあるカテゴリー間の優劣を、つまり数学的カテゴリーの力学的カテゴリーに対する優位を意味することに同じである。

ところで、カントは『批判』を通して自然科学の基礎付けを目的の一つとしている(Vgl. B20)が、この意図の達成のためには数学的原則が不可欠な役割を果たさざるをえない。と

いうのも、数学的原則が意味しているのは、諸対象の法則的連関を探求する自然科学的認識のためには、対象の受容という場面での多様性は科学的に測定されうる量の体系に関係付けられ、量的多様性として把握されねばならない、ということだからである。次節で立ち入って触れることになるが、数学的原則によって産出される現象を、カントは外延量、内包量というように、明確に量的なものとして捉えている。こうした把握を前提にして、自然科学における個々の対象との出会いが可能となる。「数学的原則という」数学の対象をその構成において産出する根本作用と同じものが、自然科学の対象をも産出するのである。」周知のように、近代の自然科学は対象の隠れた本質を追及しようとするのではなく、自然現象の量的変化のうちに存する法則的連関を探求する。こうした自然科学遂行のための基本的観点を、この原則が保障してくれる。直接的には、自然科学の基礎付けは関係のカテゴリーから導かれる経験の類推の原則によって果たされるのだとしても、数学的原則がなければ自然科学自体の探求の特性が損なわれることになる。数学的原則のもつ意義を看過してはならない。数学的原則の力学的原則に対する先行性、優位性は、カントの自然科学の基礎付けという意図に照らすことで明確化される。

この結果、哲学が量の体系として把握されることが、認識

仕方の基盤として据えられていることが確認されたといえる。しかし、量、質二つのカテゴリーは同じく数学的カテゴリーであるといっても、同じレベルで捉えられているのではない。そこで次に、この二つのカテゴリー間の関係をもとで、カントの数学の哲学への導入の有様をさらに検討していくことにする。

## 二 量のカテゴリーは質のカテゴリーに対して優位を持つ

(一) 質のカテゴリーに対応する原則は、現象の質料の産出にかかわる

数学的原則は量のカテゴリーから導かれる「直観の公理」(A161=B200)の原則と、質のカテゴリーから導かれる「知覚の予料」(ibid.)という二つの原則を含む。直観の公理は、「すべての直観は外延量である」(B202)という原則であり、知覚の予料は、「すべての現象において、感覚の対象である実在的なものは内包量すなわち度を有する」(B207)という原則である。数学的原則である以上両者ともに現象の産出にかかわるわけだが、両原則は明確に区別される。何によって区別されるのか。この区別の検討を通して両原則、両カテゴリーの関係を考察していく。

質のカテゴリーである実在性は、「感覚一般に対応するところのもの、それゆえその概念自体が(時間における)存在を示すもの」であり、そして「およそ感覚は度あるいは量を有す」(A138=B182)とされる。ここから実在性の図式は、「時間を満たす限りにおいてのあるものの量として、まさに時間における実在性の連続的同型的産出である」(A143=B183)といわれる。図式とは、一般に直観の対象を概念に包摂するための媒介をはたすものである(Vgl. A137ff=B176ff)が、質のカテゴリーの図式はとくに感覚の包摂にかかわる。質のカテゴリーの図式のこうした性質から、質のカテゴリーは現象の産出にかかわる数学的原則を導くものといっても、現象の感覚の産出にかかわるものであることがわかる。知覚の予料の原則においてカントは、現象の感覚をさして内包量と名づけたのだと容易に見て取れよう。

ここで感覚と現象の違いに留意しよう。現象と感覚は同じではない。現象は質料と形式とに区分され、そのうちの質料だけが感覚である。

現象において感覚に対応するものを、わたしは現象の質料と名づける。しかし現象の多様なものがある関係において整理されようにするものを、わたしは現象の形式と名づける。そこにおいて感覚がただ整理され、

ある形式において据えられることができるようなものは、それ自身感覚ではありえない。それだから一切の現象の質料はわれわれにアポストリオリのみ与えられるが、現象の形式はわれわれの心のうちにアプリオリに備わっていないなければならない。それゆえこの形式は一切の現象〔の質料〕から分離して考察される〕ことができる(B34)。

アポストリオリに与えられる現象の質料、つまり経験的直観である感覚は、質料とは区別された、アプリオリに主観に備わっている現象の形式に沿う形で主観に受容される。この引用箇所のある超越論的感性論では悟性作用が全く顧慮されることはないが、ここまで見てきたように、現象の感覚に対応する質料は、質のカテゴリーに基づく知覚の予料の原則を介して産出されるのである。

## (二) 現象の質料の産出には、現象の形式の産出が先行する

まず前項の最後に触れた、現象と悟性の関係について検討してみる。アポストリオリに与えられる現象の多様とは、「われわれの心」とは独立なところから、つまり物自体の触発によつて与えられるものである。カントはこの点に関して、質のカテゴリーの図式の説明において次のようにいっている。

時間は単に直観の形式であり、したがって、現象としての対象の形式であるから、現象において感覚に対応するところのものは、物自体(事象性、実在性)としての全ての対象の超越論的質料である(A173=B182)。

現象の形式とは区別された現象の質料は、「われわれの心」とは独立な物自体に対応する。感覚はわれわれの心から独立な物自体に対応項が求められるゆえ、感覚を内包量として産出するためには、認識する主観が物自体からの触発による直観の多様を、主観自身が理解できるように悟性によつて綜合、統一しなければならぬ。この点は、認識は感性和悟性の協働に拠るといふ『批判』の枠組みに沿えば明らかである。そして、繰り返しになるが、現象の質料たる感覚の産出にかかわる悟性作用が、質のカテゴリーに基づく知覚の予料の原則である。

だがこれにたしてカントは、現象の質料のみならず、質料に先行し「われわれの心のうちにアプリオリに備わる」現象の空間、時間という形式までもが、悟性の作用が加わつてはじめて認識的に価値をもつことになる」と演繹論で述べる。

対象として表象される空間(ひとが実際に幾何学において必要とするような)は、直観の単なる形式以上のもの、

すなわち感性の形式に従って与えられる多様なものの直観的表象への統合を含んでいる。だから直観の形式は単に多様なものを与えるが、形式的直観は表象の統一を与える。わたしは感性論においては、この統一を感性にのみ数えられた。それはかかる統一は、ある統合を、それは感性に属するのではないが、それによって空間、時間についてのすべての概念がはじめて可能になるような統合を前提とするとしても、あらゆる概念に先立つものである、ということ述べるためである。というのはこの総合によって（悟性が感性を規定するのだから）、空間あるいは時間が直観としてはじめて与えられるのだから、かかる直観のアプリオリな統一は、空間と時間に属し、悟性の概念に属するのではない（B160Anm.）。

「対象として表象される」、つまり認識的に価値をもちうる現象の形式は「形式的直観」として、悟性の総合的統一によって産出されるということである。またこの術語でもって、超越論的感性論における説明の不備の訂正が果たされる。つまり、現象の形式について、悟性作用を顧慮しない超越論的感性論の記述は暫定的なものであったということである。この点を踏まえて、超越論的感性論における空間、時間の形而上学的説明の説明をみてみよう。

空間はアプリオリな必然的表象であって、この表象は一切の外的直観の根底に存する。空間の中に対象が出会われないと考えることは可能であるとしても、空間が存在しないと考えることはできない（A24=B38f.）。

時間は一切の直観の根底に存する必然的表象である。現象一般に関して時間そのものを廃棄することは不可能である。たとえ現象（の質料）を時間からのぞき去ることは可能であるとしても（A31=B46f.）。

超越論的感性論の説明の不備をおぎなう形で、「空間」、「時間」の位置に悟性によって産出される現象の形式たる形式的直観を、「外的直観」、「現象の質料」の位置に悟性、それも質のカテゴリーによって産出される現象の質料を据えることができる。すると、質料に対する形式の先行性を示すこの引用から、次のことが導かれる。それは、現象の質料である内包量の産出が可能であるためには、前もって現象の形式の産出がなければならない、ということである。

(三) 量のカテゴリーに対応する原則は、現象の形式の産出にかかわる

それでは現象の形式の産出はいかにしてなされるのである

うか。結論を言えば、量のカテゴリに基づく直観の公理の原則によってである。以下このことを示していく。

まず量のカテゴリの図式、外延量の意味をおさえよう。図式は次のように説明される。

外官にとつてのすべての量の純粹形象は、空間であるが、感官一般のすべての対象の純粹形象は、時間である。しかし、悟性の概念としての量の純粹図式は数であつて、数は一を一（同種のもの）に順次加算することを包括するひとつの表象である。それゆえ数は、同種な直観一般の多様なものの綜合の統一以外の何ものでもないが、この統一は、わたしが時間自身を直観の把握において産出することによってなされるのである（A142f=B182）。

数という図式を通して同種な直観の多様を継起的に付け加えていくことで、時間表象自体が産出されるということである。こうした図式を踏まえて、直観の公理の原則でいわれる外延量は、とりわけ継起性が注目され、「部分の表象がここでは全体の表象を可能ならしめる（それゆえ部分の表象が必然的に全体の表象に先行する）ような、そうした量にほかならぬ」（A162=B203）と説明される。ところで、「超越論的時間規定」（A138=B177）とされる図式の説明では「時間」の

「産出」だけが取り上げられた。しかし、「すべての直観は外延量である」というように、直観の公理の原則によって、当然時間だけでなく空間も、外延量として産出される。どんな「短い線」も、あるいはどんな「短い時間」も、これらを認識するには、数という図式を介して直観の多様を継的に規定し続けることが必要とされる。空間、時間を問わず部分的な直観の継起的添加を通して、はじめて一定の全体としての表象が産出される。こうして特徴付けられる表象が外延量、ということである（vgl. A162f=B203f）。

こうした説明の上で、直観の公理の原則は数学を根拠付けるものとされる（vgl. A163=B204）。つまり、現象における数学の適用可能性の原理を指示するものとされる（vgl. A733=B761）。数学的認識は概念に対応する直観をアプリオリに示す理性認識であるため「非経験的直観」が必要とされる（A713=B741）。よつてこの原則は、直接的には、非経験的直観にかかわる。外延量としての現象の産出とは、非経験的直観としての現象の産出ということになる。ところで『批判』において純粹の意味は、アプリオリの意味に等しい。つまり、純粹とは経験的要素に一切関わりないということである。よつて非経験的直観としての現象の産出は、純粹直観としての現象の産出と言い換えられる。

先にみたように、感覚にかかわる経験的直観が現象の質料

である。したがって非経験的直観たる純粹直観は、質料に対して現象の形式をさすことになろう。現象の形式である純粹直観が外延量を意味しているといえる。事実カントは、外延量の産出にかかわる悟性作用を、「すべての直観の本質的形式としての空間と時間の綜合」(A165=B206、傍点は引用者)と表現している。そして前項で現象の質料に対する形式の先行性が示されたのと軌を一にして、内包量である経験的直観に対する、外延量たる純粹直観の先行性が述べられる。「経験的直観は純粹直観(空間と時間)によつてのみ可能である」(A165=B206)と。この文は、超越論的感性論で示された現象の形式の質料に対する先行性を、悟性作用を含めて定式化しなおしたものと捉えることができるだろう。

たしかに、知覚の予料の原則も数学的原則として、現象を量的多様として産出するものである。つまり直観の公理の原則同様に、知覚の予料の原則も数学を基礎付けていると考えられる。しかし、これまでの質料に対する形式の先行性の考察から明らかのように、現象の形式にかかわる直観の公理の原則が、はじめて数学を哲学へ導入することを可能にする。ゆえに次のようにいわれる。「諸現象についての数学のこの超越論的原則〔直観の公理の原則〕は、われわれのアプリオリな認識に大きな拡張を与える。なぜなら、この原則のみが、純粹数学をこの数学の完全な正確さにおいて経験の諸対象に

適用可能にするものだからである」(ibid、傍点は引用者)と。

こうした純粹直観としての外延量の産出は、演繹論でいわれた形式的直観の形成と同じことを意味している。理由を示す。形式的直観としての空間も「幾何学において必要とされる」空間とされていることが一つ。加えて、形式的直観を形成する綜合によつて「空間あるいは時間が直観としてはじめて与えられる」(B160Anm.)<sup>1)</sup>とで、アプリオリな概念、経験的な概念を問わず、「空間、時間についてのすべての概念がはじめて可能になる」(ibid、傍点は引用者)とされる。これは、先に挙げた外延量の産出にかかわる悟性の綜合作用が、「経験の諸対象のすべての認識を可能にする」(A166=B206)とされるのと同じ事態をあらわしているからである。つまり形式的直観、外延量両者が、認識成立の前提として同様に把握されている。純粹直観たる外延量が形式的直観と同様に扱われていることが確認されたことで、外延量の産出を現象の形式の産出とみる当項の解釈の正当性が裏付けられる。

外延量の説明の要約的位置を占める次の箇所は、こうした背景のもとに理解されねばなるまい。

あらゆる現象において、単なる直観は空間か時間であるから、あらゆる直観としての現象は外延量である。現象は(部分から部分への)繼起的綜合によつてのみ、把握に

において認識されることができるところである (A163=B203)。

外延量が現象の形式として、内包量たる現象の質料に先行するという点を踏まえるならば、「あらゆる直観としての現象は外延量」というのは、あらゆる直観としての現象は、まず外延量として産出されねば現象として成り立たない、ということになる。現象の形式の産出が、つまり現象が外延量として産出されることが、現象の認識を可能にする第一の条件である。

直観の公理の原則は、数学の位置付けを見ればわかるように、知覚の予料の原則なしにも作用することは可能である。数学に経験的要素は必要ないのだから。これに対し、知覚の予料の原則は直観の公理の原則なしには意味を失う。直観の公理の原則は知覚の予料に先立つ、知覚の予料の原則に対する優位を持つ、ということができよう。これはそれぞれの原則の根底にあるカテゴリー間の優劣を、つまり量のカテゴリーの質のカテゴリーに対する優位を意味することに同じである。たしかに量、質の両カテゴリーは数学的カテゴリーとして一括され、対象を量的多様性として産出する原則を担うものとされる。しかし、就中その形式面に関わる量のカテゴリーが重要視され、数学のあらゆる経験的对象への——経験的对象には、内包量として産出される現象も含まれる——

適用可能性を保障するものとされる。

ところで物自体は、質のカテゴリーの図式の説明から明らかなように、超越論的質料として内包量にかかわるものとされている。しかし、認識は物自体の触発に因らずにはじまることはないのだから (vgl. A19=B33)、量のカテゴリーも物自体からの触発を契機として作用することになる。量、質両カテゴリーとも、物自体の触発と同時に作用しはじめる。つまりここでいう量のカテゴリーの優位性は、時間的な前後関係に関することではない。時間的に先行的にまず中身のない形式としての直観が産出され、その後の中身となる質料が産出されるというのではない。形式の成立なしには質料を容れる余地は無いという、権利上の先行性についてである。

### むすび

かくして、量のカテゴリーの他の三カテゴリーに対する優位性が示された。この優位性は経験判断が成立するための条件として、どのカテゴリーによる作用がより先行的か、という点からみたものである。

たしかに四つのカテゴリーには、それぞれほかのカテゴリーに、もちろん量のカテゴリーだけなど還元できない作用様式が与えられている。それどころか「夢の場合、量や質

はもつが、諸表象の間に因果性のないことが多い」ように、数学的カテゴリーだけでは客観妥当性が認められないこともある。客観妥当性を持つ判断の成立のためには数学的カテゴリー以上に力学的カテゴリーが重要な役割を果たしていると言えよう。また現象の形式があつても質料が付与されないようでは、その形式は対象とかかわりあうことはない。対象との実質的にかわりという点からみるなら、質のカテゴリーが量のカテゴリー以上に重要な位置を与えられているともいえよう。しかし力学的カテゴリーには数学的カテゴリーが、質のカテゴリーには量のカテゴリーが先行的に作用しなければならぬ。要するに、量のカテゴリーの先行的作用なしには、量以外の三つのカテゴリーは作用することができない。量のカテゴリーによって成立する現象の形式を前提した上で、はじめてほかの三つのカテゴリーによる作用は意味を持つことになる。カントは量のカテゴリーによる悟性統一を、判断形成の基盤として捉えていた。

『負量の概念』で企図された数学的概念の応用による哲学の改善は、『批判』において、数学を基礎付ける量のカテゴリーによる作用を、認識の成立の前提として取り入れることで果たされる。こうした取り入れによって、哲学は臆見の域を脱し、超越論哲学という形で、確実性を主張できる学問として措定されることが可能になったといえるだろう。

『批判』においても、数学と哲学の方法論の違いは維持される。しかし、そうした違いの維持とは対照的に、数学的概念は哲学の最深部へと取り込まれる。このときはたして、数学と哲学は相互に独立な学問であると単純に言うことはできないのだろうか。また、本論における数学の哲学への導入についての議論は、他のカテゴリーに対する量のカテゴリーの優位性を示すという、いわば『批判』の輪郭部分をなぞっただけで済まされている感は否めない。数学と哲学の関連について、就中量のカテゴリーの意味に着目し、さらに立ち入った検討を加える余地があると思われる。

注

- (1) カントの著作からの引用は、『純粹理性批判』については慣例に従い、その他はアカデミー版を用い、ページ数を本文中に示す。また引用文中、引用者の捕捉は「」であらわす。
- (2) 次節で示すように、「純粹直観」には量のカテゴリーの原則が、「經驗的直観」には質のカテゴリーの原則が対応する。
- (3) 近藤良樹『弁証論的範疇論への道程—カント・フィヒテ・シェリング—』九州大学出版会、1988年、S13
- (4) G.マルティン『カント—存在論および科学論—』門脇卓爾訳、岩波書店、1962年、S49
- (5) 純粹直観と形式的直観を同一視する解釈として次を参照のこと。有福孝岳他編『カント事典』弘文堂、1987年、「形式」の項。  
(なかむらしゅういち 哲学哲学史・博士後期課程)